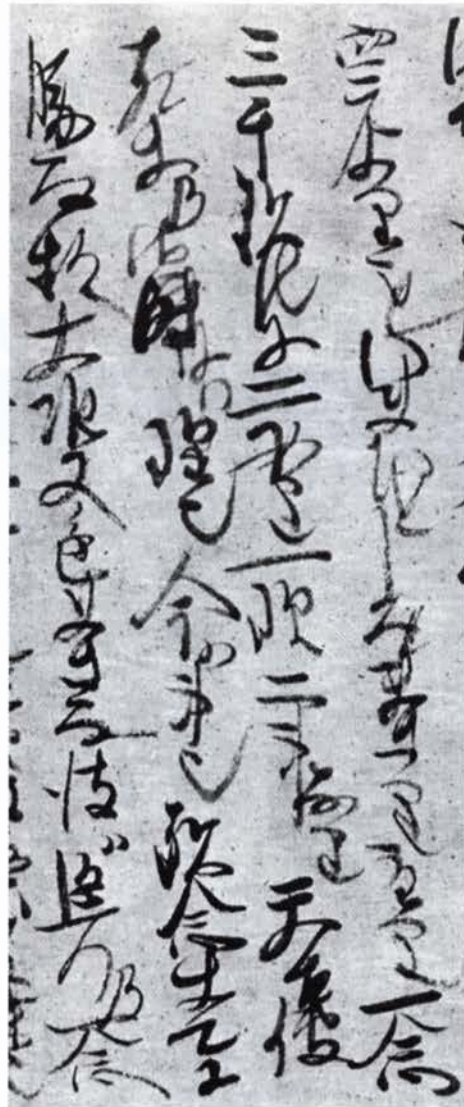




今月の御聖訓



（「四魔よりも、いまひとしをまさりたり。」一念）
【四魔よりも、いまひとしをまさりたり。】一念

（三千の観法に二あり。一には理、二には事なり。天台・伝）
三千観法に二あり。一ニハ理、二ニハ事なり。天台・伝

（教等の御時には理なり、今は事なり。観念すでに）
教等の御時には理也、今は事也。観念すでに

（勝る故に、大難又色まさる。一彼れは迹門の一念一）
勝る故ニ、大難又色まさる。【彼は迹門の一念】

【治病大小権実異目 全集九九八頁】

目次

《第52回法華講総会特集》

今月の御聖訓

住職指導.....菅野憲道 2

講頭挨拶.....森 秀之 8

カメラ・アイ《法華講総会》.....10

講演「不軽菩薩の利益」.....興風談所 山上弘道 12

所感発表「幸せを実感する日々」.....新谷信子 18

.....21

六月の行事 水無月詠草 恵日俳壇 訃報

「継続は力なり」をテーマに

第五十二回源立寺法華講総会を開催



五月十二日（日）午後一時から、第五十二回法華講総会が、源立寺本堂において開催されました。

当日は、午前中はもったものの、雨の予報の通りお昼を過ぎると時々雨がぱらつくはつきりしないお天気ながら、定刻午後一より、菅野ご住職の導師により、法華講物故者追善の読経・唱題が奉修され、その後、場内の準備を整えて総会へと移ると、まず開会に先立って司会・進行の井元恵子さん・中川美奈子さんから、新入講者が紹介がされた後、中川美奈子さんの開会の辞より総会は始まりました。次いで「諸法実相抄」の行学二道のご聖訓を全員で奉唱し、森講頭の挨拶に続いて西良子副講頭の会計報告、松井照雄顧問の監査報告、寺川春美副講頭の活動報告がありました。

その後、大阪地区の井上真理さんと、同じく大阪地区の新谷信子さんが登壇され、所感を発表されました。そして、小憩に入る前、松井顧問が立たれて恒例の体をほぐす体操があり、一旦小憩となりました。

小憩の後、先日、三十年に及ぶ御書の研究成果を上梓された興風談所の山上弘道師より、「不軽菩薩の利益」（十二頁）と題してご講演をいただきました。

その後、菅野ご住職の住職指導、さらに虫邊慶次さんの閉会の辞をもって、法華講総会は終了し、引き続き、第十二回の新菩提寺建立護持会へと移り、経過並びに会計報告、指導教師の挨拶の後、全員でお題目を三唱して、法華講総会・新菩提寺建立護持会とも滞りなく終了しました。

【法華講総会 住職指導】

心の財があらゆるものを活かす

住職 菅野 憲道

源立寺の法華講総会誠におめでとうございます。

ただ今講演をいただきました山上弘道師が、先日出版された本がここにあります。『日蓮遺文解題集成』という大変分厚い本です。内容は、ほとんど専門的な、御書の一々について、その書誌、由来、真偽問題などについて正面から取り上げた画期的な本だと思えます。

大聖人の御書については、従来は護教的な立場から、自分の



山上弘道師著『日蓮遺文解題集成』

信仰に合っていれば用いるし、合わなければ用いないというよ
うな、偏った見方がされてきているように見えるのですが、そ
れに対して公平で客観的な文献・書誌の研究を通じて、本来あ
るがままの大聖人のお姿と教えを尋ねていく道を開かれたよう
に思うのです。

ともあれ、山上師が三十年にわたって研鑽してきた成果の一
つがここに完成しましたのでご紹介した次第です。

生老病死をどう受け止める

次に、ただ今の休憩時間に、北摂地区のSさんが、ご主人の
押してくれる車椅子でお参りされまして短い時間でしたがお会
いできました。昨年は、お元気だったのですが、ALSという
難病で、筋肉が衰えてだんだん歩けなくなるし、呼吸も困難に
なってくるなどの症状が出る、やっかいな病気です。

これについて、私も数年前にパーキンソン病の認定を受けて
おりまして、行動がままならず、何とか法務をこなしているよ

うな状態ですが、その方と一緒に病気に負けないよう、お互いに頑張ろうということで別れました。

現代社会は少子高齢化ということで、今日、ここにも高齢の方がたくさんお参りされていらっしゃるのですが、生老病死の問題は決して他人ごとではありません。明日は我が身というところで、誰もが避けて通れない関門です。老いも病も死も確実にやってくることです。避けて通ることができないのなら、如何に受けとめ、如何に乗り越えていくかです。

とくに死ということは、これほど厭われることもないのですが、これほど確かなこともないのです。生まれた時から、死ということは定められているのです。それ故に、

「されば先づ臨終の事を習ひて」(「妙法尼御前返事」全集一四〇四頁)

とも、

「とにかくに死は一定なり」(「上野殿御返事」全集一五六頁)

とも仰せられています。

この死や老い、病に直面した時に、どう受け止めていったら良いのかという問題だと思っております。

私は以前、阪神大震災で源立寺の本堂瓦屋根が崩落した際、皆さまのご協力をいただいて、立派に修復を成しとげたのですが、その時の過労がたたったのか、癌になったのです。癌の進み具合については死に至るものではないという自分なりの感触がありましたから、あまり不安感などは感じなかったのです。

しかもこの病気を経験したことは、非常に貴重なことであっ

て、これはその後、講中でも何人かの方が癌でお寺に相談に来たことがあります。そういう時に癌の先輩、癌を経験したものととして、その心理状態や進行状況もある程度経験していますから、食事やサプリなども含めて、多少は有益な役に立つアドバイスができたかと思うのです。

一例をあげると、もし皆さん方が手術前なら何をするか、ということ。私は歯磨きをするよう勧めます。(中略)手術が終わった後に、よく痰が詰まるのですが、これを軽減するためです。また、毎日の体調や治療・投薬などの概要をノート(日記)につけることも医療ミスを防ぐ有効な方法です。勿論お数珠と経本は巾着袋などに入れて身近かに置きます。それから入院生活では、指示されているわけでもないのに日中もベッドに横になっていられる人が多いのですが、昼間に眠ってしまうと夜眠れません。運動不足にもなります。安静を指示されていなければ、なるべく普段の生活のリズムを守り、階段の上り下りなどで体力の維持に努めることです。また癌の手術前後の心理状態ですが、例えば周囲の健康そうな人達を見て、何で自分だけがこんな目にあうのかといった、ひがんだ心理状態になったりしますが、決して自分だけではありません。多かれ少なかれ誰もが病や悩みをかかえているものです。また家族や仲間達に冗談を言いあって笑ったりしていると、それを見て自分が生死の境に立たされて大変な時に何が楽しいかなどと腹が立ったりします。あるいは街中を歩いていても、フツと街全体が灰色に見え寒々しく感ずるようになったりとか、普段は無宗教で通した人が神仏にすがり、それも、「願いが叶ったら〇〇します」

式の取り引き条件を考えてみたり、不安や迷いからいろいろな心理が起きてきます。身体が病むと心も病みやすくなってくることにについて、そういうことではないんだということをアドバイスすることができて、よかったなと思っっているのです。

癌を患って良かったなどと思うことはないだろうといわれるかも知れませんが、本当に災いが転じて幸いになることはいくらであるのです。例えば、大聖人は、

「病によりて道心はをこり候か。」（「妙法尼午前御返事」全

一四七九集頁）

と仰っています。

病気になるって初めて信仰心を起こすということですが、実際に大病をしますと、まず第一に良いことは、つまらない欲がなくなることです。

普通は、我われ平凡な人間はいつも貪欲の心に煩わされているものです。儲かった損したとか、好きだ嫌

いだとか、誰かが陰口を叩いていた

ことを知って許せない等と怒り心頭に発したり、時にはこの先どうなってしまうのだろうと不安で悶々として病気でもないのに夜も眠れないということもあります。そういう雑事が病気を前にすれば些細なことで、どうでもいい事に思えるのです。

病室の窓から見える公園や道路はいろいろな人が行き交いま



職住ご野菅される指導

すが、その人たちも何れは死ぬんだと思えば、それも忘れて目の前の小さなことに執われて争い、徒らに日を送り、詮もないことに泣き笑いしているのかと、何となく気の毒に思えてくる、そういう心理もおきるのです。

それ以上に、もしこの法華經の信仰をしている方ならば、黒澤明の『生きる』という映画ではありませんが、残された時間を如何に生きていくかということの方に、心が移っていくのだと思うのです。

この世に生を受けた以上は早かれ遅かれ必ず死ぬ時は来るんだから、自然の摂理に抗あらかって、死にたくないは大騒ぎをしてもしょうがないのです。ただそのことについて、いかに死ぬかではなくて、与えられた命を、残された時間をいかに悔いなく生きるかということに、意を注ぐべきだと思うのです。

小生も役目柄、講中の方を幾人も送らせて頂きましたが、「いかなる病障りをなすべきや」と大聖人も仰せのように、病になつたからといってうろたえるものでもなく、むしろ我執が薄れて「大海の一滴」のように、妙法蓮華經の法界に住まいするような心で題目を唱え、終末の不安や恐れもなく、むしろ深い達成感や感謝の心で悔いなく逝かれた方々を多く見てきました。

もし皆さんに病魔、死魔が訪れた時には、いつもと変わらず、魔に対して「自分は日蓮大聖人の弟子・檀越の一分である」と告げるくらいの覚悟を、普段から心していきたくものです。

観念が軽視される現代

今日お話ししようと思いましたが、最近つくづく感じることは、この法華経の信仰に照らせば、日本は社会全体がだんだん行き詰まってきているように見えてなりません。日本はこのまま行つて大丈夫なんだろうかという懸念が消えないのです。

また社会全体が停滞する中で、自分たちの信仰をどう位置づけて、どう未来に向かつていけばよいかということについても明らかではありません。これは私見ですが、不透明な時代に、少しでもご参考になればとの思いで申し上げておきます。

まずどの宗教でも観念を抜きにしてはありえません。仏教でも仏知見や一水四見の説が示すように、いかなる観念を持つかによつてその人を取りまく世界は変わるものです。「夫れ浄土といひ穢土といふも外にあるものではない、人の胸の間にある」等の大聖人の仰せを引くまでもないことです。

ところで、日本のたどつてきた思想状況ですが、日本の国は明治維新の時に、大きな改革が行われました。それは何かというと廃仏毀釈と国家神道による国民の統合ということですが、

とりわけ国家神道をバックボーンにした天皇制と国体思想による統制、教育勅語や軍人勅諭などの精神主義による国家への忠誠を義務づけし、国家への貢献度や協力度によつて分別し、

ピラミッド型の階層社会を形成してきたのです。幕藩体制はいわば分権的・自治的・連邦制のような体制でしたが、骨太の中央集権国家となつて、教育制度や戸籍制度、姓名・家族制度、経済制度や金融制度など、一気に改革が進みました。強固な陸海軍と政治体制の下に、ほぼ全ての人が臣民として統制支配されたのです。日清・日露戦争を通じて、一気に欧米列強諸国に肩を並べるようになったのですが、その成功体験が怨となつて日本に神風の吹くことを信じて日米戦争に突入していったのです。で、そこで見たものは圧倒的な物量とすさまじい破壊力のもたらしたものです。大和魂も七生報国も無力だったのです。日本人は焼け跡に立つて思ったでしょう。「精神主義では物量に勝てない」と。そして戦後の食糧不足でも空腹を抱えながら痛感させられたのです。「観念論では腹はふくれぬ」と。

この敗戦がトラウマになつて、日本人は心の問題を軽視します。今に至るまで多くの日本人は議論の途中で「そんなのは精神論だ」とか「観念論は必要ない、現実がすべてだ」などと否定的に使っているのを見聞していると思います。

色心不二こそ諸法の実相

このような理解や認識は仏法の説くところとは、かなりかけ離れております。大聖人の教えというのは一念三千論ですから、御書には、

「観念すでに勝る故に、大難又色まさる。」（「治病大小権実異目」全集九九八頁）

とか、

「己心の外に法ありと思はば、全く妙法にあらざ、眞法なり。」（「一生成仏抄」全集三八三頁）

等と、「観心」「観念」は修行の要諦であり、これを「心こそ大切」「命一念にすぎざれば」等と仰せられております。

仏教の基本は二而不二という捉え方です。世間の二元対立的な捉え方では実相は捉え難いのです。自他の分別といっても、それ自身で独立した実体を有しているわけではなく、他との関係による一時的現象であり、観点が変われば自他一体です。

近代の欧米式の文明はすべてのごとを0か1かに置き換えて分析する方法が基本となっており、0でなく1でないもの、0であり1であるものは無視されるわけです。まして、諸行無常の理の示す処は、万物が常に変化し続けることで、二元対立そのものが変化してしまい、実相とかけ離れてしまいます。

物と心（色心不二）、内と外（正報と依法）、因と果、自と他など、一往は分別して二と観ても、再往は一如して本末究竟等となるのが二而不二です。

現代の人々が無自覚に影響されている唯物論的な観念は、現実世界は全てが物質で形成されており、精神や観念は幻想であるとして、二元対立的にすべてのものは現実の方が確かで、数や力のあるものが価値があると思込んで、心よりモノが大切だというような観念に支配されてしまえば、仏教とは縁遠くなってしまう。

皆さん方も、これまで人に信仰の話をして、たいていの場合それは観念論だということに遮断されて、信仰の話をする機

会がないという経験があるのではないかと思えます。

しかし、現実がすべてといっている割には現実世界はかんばしくありません。過度な競争をしいられる現実は変わらず、一方には勝ち組・負け組などと分断化は定着し、ネット犯罪は人間不信をあおり、格差と孤立化は確実に広まって、治安の良さも昔話になりつつあります。

あるいは日本全体で経済成長を追い求めておりますが、皮肉にも失われた三十年といわれるように、経済的にも停滞しているのです。何でそんなことになってしまったのかと考えてみると、コロナのパンデミックや大災害の影響もありますが、やはり人間自身の観念の問題ではないかと思えます。画一的でマニュアル化された社会は創造力や人間力に乏しく、勤勉さや誠実さは失われ、シェアとかコスバなどといった短期的な視点ばかりで、戦略的な観念が欠けていたようです。

また、人間自身の問題、価値観・人生観や世界観が未熟で大局的な観点が欠落しているなど、いろいろ考えられます。要するに、経済優先の数字に表れた外相も結構だけれど、人間の内面に起きつつある心の劣化に気づかなければ、この傾向はとめられないと思います。

物と心、色心不二

もの自体は、絶対的な価値を持っているわけではなく、いかなる財物も無常の理から遁れることはできません。物の豊かさはかならずしも人に幸福を約束するものではないのです。

それ故に、大聖人は、

「蔵の財よりも身の財すぐれたり。身の財より心の財第一なり。」（「崇峻天皇御書」全集一一七三頁）

と仰っているのです。

心の財が第一ということとは、心が全てであるということです。ある書に一念三千の現代語訳を、「心が全て」と訳してましたが、まったくその通り、我われがお金が全てであると思つてい

るのは、百八十度違う仏法世界の生き方なのです。心が全てであるからこそ本因妙ということなのです。自分が今、置かれた状況をどのように捉えていくか、そのことによつて我われは畜生道を歩むのか、仏道を歩むのか、みなそこで道が分かれてくるのだと思います。

実際今の世の中いろいろな分野があり、さまざまな世界で種々の人生があるのでありますが、どの世界をとつても、ただ唯物論一本ヤリで成り立っている世界はないのです。例えば科学の世界では、有名なノーベル賞の学者の随想集に、発見発明はたいいていの場合、インスピレーション、ひらめき、あるいは直観や天啓によることが多いと書かれております。ある数学者は長い数式の答えがパツと浮かび上がるといっていますが、これこそ心の働きであり、一念三千の不思議さが現れているのです。

もちろんこういふことは科学の世界だけではなくて、スポーツの世界でも、あるいは経済、医学、音楽や芸術の世界でも、メンタリティーが重要なことだといふ事は共通の認識になりつつあるようです。

実際に一つの物事が起こつた時を、それをどのように受け止

めるかということ、それをマイナス思考で捉えれば六道の世界に落ちてしまうことになるし、プラス思考で考えれば、どういふ状況でもそれはそのまま修行の道場として、菩薩道に入ることができるといふことになるのです。

ですから、「心こそ大切なれ」といふことが、信心の一番大切な指標ではないかと思ひます。

一念三千、心が全てということ、これがお金が全てだと思つている人に対する最大の折伏ではないでしょうか

源立寺法華講の皆さん方も物欲の信心ではなく、これよりは、「心の財」を少しでも積み自他ともに利することができるよう心がけましょう。「心の財」を積むことによつて、初めてあらゆるものが活かされていくんだということを、心に留めていただいて、次の一年、また頑張つて行きたいと思ふのです。

なお私も難病で、滑舌が悪くなつて、また普段から無愛想な顔しかできませんで、粗雑な対応で迷惑をかけがちですが、これも修行中の身とご容赦していただき、意のあるところをお酌み取り願ひます。

それではまた、五十三回を目指して、一緒に信心修行に励んで行きたいと思ひますので、宜しくお願いします。

以上です。



【講頭挨拶】

継続は力なり II

講頭 森 秀之



森 講頭

げたいと思います。

さて、本日の総会のテーマは、昨年
に引き続き、

「継続は力なり」

を、掲げさせていただきました。

昨年も拝読させていただきましたが、
再度「此経難事抄」ともいわれる四条
金吾殿へのお手紙を、拝読させていた
できます。

「法華経の文に『難信難解』と説き
給ふは是れなり。此の経をききうく

る人は多し。まことに聞き受くる如く
に大難来たれども『憶持不忘』の人は
希なるなり。受くるはやすく持つはか
たし。さる間成仏は持つにあり。此の

経を持たん人は難に値ふべしと心得て
持つなり。『則為疾得 無上仏道』は
疑ひなし。三世の諸仏の大事たる南無
妙法蓮華経を念ずるを持つとは云ふな
り。経に云く『護持仏所屬』といへり。
天台大師の云く『信力の故に受け、念力
の故に持つ』云云（全集一一三六頁）
との有名なご文です。

このご文にある「憶持不忘」の「憶
持」とは、『岩波仏教辞典』によれば、
「記憶して忘れないこと。翻訳語とし
て憶念と同一。しかし、日本、中国で
憶念と区別して理解される場合、憶持
には受持して忘失しないニュアンスが
濃い。」

とありますが、私は、大聖人の仰せにな
る「憶持不忘」とは、苦難、迫害に値つ
ても妙法を受持し、決して退転しないと
いうことが土台にあると思います。

現代は、日本国憲法下で「信教の自
由」が保障されていますので、大聖人在

本日、ここに第五十二回源立寺法華講
総会を、皆様のご参詣のもと無事盛大に
開催することができましたことは、誠に
ありがたいことと、共々にお慶び申し上

世当と違って、妙法を弘通・折伏したからといって、政府からの弾圧、迫害はまずありません。せいぜい身内や周辺からの反発があるくらいかと思います。

しかし、源立寺僧俗におきましては、創価学会の謗法問題に端を発した正信覚醒運動の中で、大聖人・日興上人以来の富士門流の正嫡論から、本山・大石寺から擯斥処分という、違う意味においてとんでもない不当な弾圧を受けるといふ経験をしています、

それら法難ともいえる弾圧は、大変厳しく、苦しいものではありませんが、改めて振り返ってみると、せめてそれくらいの苦難は覚悟して、我等こそ宗開三祖の「正信の信仰者」であるとの、一人一人の信心決定を指して継続して精進していきたいものです。

また、それにも増して忘れてはならないのは、自らの貪欲、瞋恚、愚痴といった三毒の心理状態や、慢心、疑惑という

心理状態を、その時々々に南無妙法蓮華經を念じることによって、瞬時に臨終一念の心に転じて、受持・継続していききたいということなのです。くれぐれも心が懈怠の謗法に陥らぬよう、行住坐臥に南無妙法蓮華經の信仰を持っていたきたいと思えます。

本日参詣されました源立寺法華講中の皆様も、菅野ご住職の指導のもとで、講員同士が、時にお互いに折伏しあい、時に励ましあつて精進していただければ有り難いことだと思います。

「継続は力なり」ということは、私は、そのまま我われの信仰の要である「受持即観心」という言葉に言い換えることができると思います。

「受持即観心」とは、我われ末法の凡夫が成仏するための観心の修行は、南無妙法蓮華經の御本尊を受持することに尽きるということだと思います。

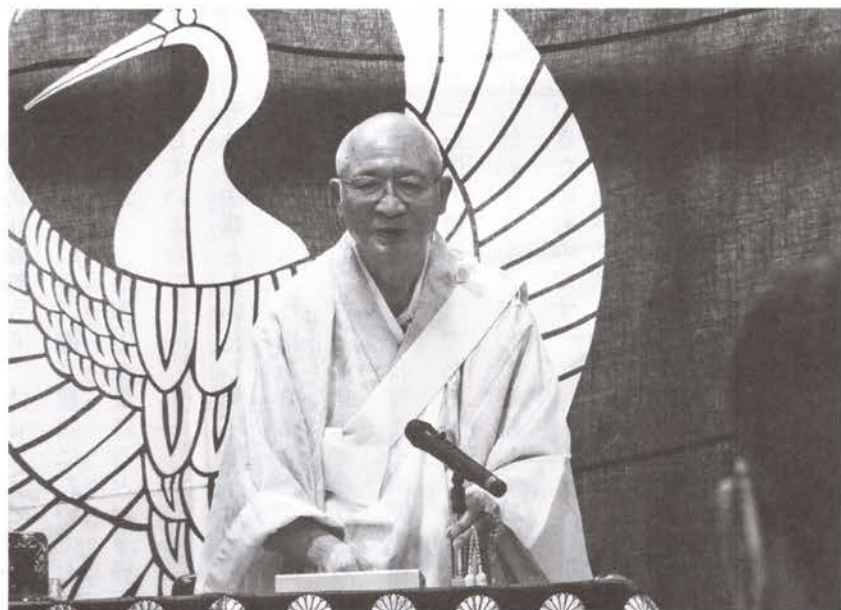
「受持即観心」については、大聖人様

が「観心本尊抄」にその要諦をお示しになられ、それを日寛上人が受けて説明されていきますが、本年はこの「観心本尊抄」を、源立寺法華講の課題御書として一年を通して取り組んで行くことになっており、すでに昨年末からご住職より、毎月の御講で講義をいただいておりますので、皆さまにはぜひ、毎月のお講にご参詣・ご聴聞いただきますようお願いする次第です。

どうか、講員の皆様には、本日の總會を節目として、日々の世事も大事ですが、この正しい信仰を目指す仏事を優先するというお気持ちを強くお持ちいただいて、自らの誇りとも感じていただいて、手続の師・菅野ご住職のもと、共に信心修行に励むことをお誓い申し上げます。

本日、まことにおめでとうございました。

2回 法華講総会



拈藪：菅野心住職



講頭挨拶 森 秀之講頭



法華講總會講演

不 輕 菩 薩 の 利 益

興風談所 山 上 弘 道

只今ご紹介にあずかりました山上弘道と申します。

本日は第五十二回源立寺法華講總會、誠におめでとうございます。五十二回といえば半世紀以上ですからねえ。その間のご住職始め源立寺僧俗の皆様の並々ならぬご精進に、心より敬意を表したいと思います。

その意義深い総会にあたり、「不輕菩薩の利益」について少々お話をしたいと思います。まず『聖人知三世事』を拝読いたします。

「後五百歳には誰人を以て法華經の行者と之れを知るべきや。……又我が弟子等之れを存知せよ。日蓮は是れ法華經の行者なり。不輕の跡を紹繼するの故に。輕毀（きょうき）する人は頭七分に破れ、信ずる者は福を安明に積まん。」（題目三唱）

— 文永八年の法難の法義的意義

大聖人はすでに、文応元年『立正安国論』幕府上申の年に、『唱法華題目抄』において、末法の世の弘教の方軌として不輕

菩薩の利益について述べておられますが、集中的に身に当ててそれを論じられたのは、文永八年の法難を契機としてのことです。

文永八年九月十二日の龍口の頸の座、その後の極寒佐渡へのご流罪という過酷な法難、これを文永八年の法難と申しますが、それは門下にもおよび、日朗師をはじめとして五人が土牢に禁獄され、さらに鎌倉に住する僧俗には、心ない非難中傷が雨嵐のように注がれました。ことにこれまで大聖人から厳しく批判されてきた諸宗の僧たちは、「日蓮や門下たちがこのような難を蒙るのは、彼等の妙法信仰が邪教である証拠である。」と鎌倉中に吹聴したのです。

このような厳しい状況の中で退転する者も出ましたが、多くの門下は齒を食いしばってその非難中傷に耐えておりました。大聖人はそのような門下のためにも、是非ともこの大難には、正法を弘通する上において大いなる意味があることを、經文に照らして内外に示す必要があつたのであります。

文永八年十一月一日、大聖人は塚原の三昧堂に到着されまし

た。現在の暦では十二月の中旬です。極寒の佐渡、そして身辺も整わぬ劣悪な環境の中で、大聖人はその解答を内外に示すべく、法義書の執筆に取りかかられました。それが翌年二月に雪中において完成した『開目抄』です。『開目抄』では、なぜ正法を弘通する者が大難に値うのか、その理由を四つの視点から論じられています。

その第一は『勸持品』の色説です。法華経の『勸持品』には、末代の悪世に法華経を弘通すれば必ず三類の強敵が出現し、あらゆる手段をもちいてそれを阻止するであろう、と述べられています。そうであれば今法華経を弘通して大難に値うことは、まさに仏のこの預言を証明しているのであるといわれるのです。

第二には神天上法門です。たしかに法華経の『安樂行品』や『陀羅尼品』などでは、諸天は法華経の行者を守護すると誓われています。ではなぜ今法華経の行者を護らないのか。それはこの国には邪教がはびこり、諸天が食する法味たる正法が失われている故に、天上に去ってしまわれて、救うことができなのだと仰せられています。

そして第三・第四が不軽菩薩に関することからです。まず第三番目の理由として不軽菩薩の罪業観をあげられています。『不軽品』には、不軽菩薩は但行礼拝することによって、多く



講演される山上弘道師

の人々から石を投げられたり杖で打たれたりという難を受けたが、そのことによって「其罪畢已（ごさいひつち）——「其の罪畢（お）え已（おわん）ぬ」、すなわち過去に積んだ重罪を消すことができた、と述べられているのです。

これは『涅槃経』に説示される「転重軽受法門」、すなわち本来は過去の重罪によって、未来世において地獄に墮つべき身であるところを、今生に正法弘通により難を受けることによってそれを帳消しにできる、という法門でもあります。

そして大聖人はこの法門を根拠として、まさに我われは今大難を蒙ることによって、過去の重罪を消しているのだと仰せられるのです。

そして第四にあげられるのが、不軽菩薩の逆縁毒鼓の折伏行です。これは後で詳しく述べますが、ようするに末法という濁悪の世にあつて法華経を弘通する場合、不軽菩薩の利益、すなわち不軽菩薩が多くの人々から杖木瓦石の難を受けることによって、逆縁を結び下種結縁をしていった、逆縁毒鼓の折伏行こそが正当な弘教の方軌であり、我われはそれを実践しているのだと仰せられています。

このように大聖人は受難の意義を説かれたのでありますが、本日はその内の第三・第四に示された不軽菩薩の利益に照準を

合わせて、もう少し深く掘り下げていきたいと思ひます。

—不軽菩薩の利益の要点

さてその要点ですが、次の三点に要約されます。第一に冒頭拝読した『聖人知三世事』に見られる、不軽菩薩の跡を紹継するとのご確信は、ご自身の深い内省を経て到達されたものであることを拝していきたいと思ひます。次に第二点として、大聖人が示された不軽菩薩の逆縁毒鼓の折伏行の実践と、それによつて成ぜられる逆縁の広宣流布について述べたいと思ひます。そして第三に、自ら行ぜられた不軽菩薩の利益を、大聖人は門下に対しても実践すべきことを、指示・遺命されていることを拝して行きたいと思ひます。

—大聖人の過去法華経誹謗の罪のご自覚

大聖人は『開目抄』に次のように仰せられています。

「我無始よりこのかた悪王と生まれて、法華経の行者の衣食・田畠等を奪ひとりせしこと、かずしらず。当世日本国の諸人の、法華経の山寺をたうすがごとし。……今日蓮、強盛に国土の謗法を責むれば、此の大難の來たるは、過去の重罪の、今生の護法に招き出だせるなるべし。」

「私は遠い過去世において悪王として生れ、今現在国主が我等法華経を弘通する者を苦しめているように、衣食や田畑を奪い取るなどして苦しめた重罪があるのである。今私日蓮は、強盛に日本国の謗法を責めることによつて大難を蒙っているのだが、それは過去に積んだ重罪の報いであり、その重罪をこの度の受難によつて、消し去ることができるのである。」と大聖

人は仰せられているのです。ここに大聖人が、自らの過去に重罪有りとの認識を示されていることは、不軽菩薩の利益を紹継する上で、極めて重要な事柄であります。

さらに大聖人は『開目抄』において、次のように自らを、真の法華経の行者たり得るのかと問うておられることにも、我われは思いを致さなければなりません。大聖人は次のように仰せられます。

「日蓮案じて云く、法華経の二処三会（にしよさんね）の座にましましし日月等の諸天は、法華経の行者出来（しゅつた）い）せば、磁石の鉄を吸ふがごとく、月の水に遷（うつ）るがごとく、須臾（しゅゆ）に來たりて行者に代はり、仏前の御誓ひをはたさせ給ふべしとこそをばへ候に、いままで日蓮をとぶらい給わぬは、日蓮法華経の行者にあらざるか。されば重ねて経文を勘へて、我が身にあてて身の失をしるべし。」

「諸天の加護がないのは、自分が法華経の行者たりえぬからではないのか。」——『開目抄』では実に三度まで、このように自らに厳しく問われているのであり、私たちはこのこともしつかりと拝していかなければなりません。すなわち冒頭拝読した『聖人知三世事』の、不軽の跡を紹継するが故に真の法華経の行者であるとのご確信ご宣言は、このような大いなる内省に裏打ちされたものなのです。

私たちは大聖人の弟子檀越として、常に正義に立つ存在でありたいと願う気持ち、さらにはそうであるとの自負を持つことは大切であります。しかしそれは、しっかりとした内省に裏打ちされていなければならないのでありまして、それが欠如した

時、人はえてして慢心に陥るといふことを、私たちは深く胸に刻みたいものであります。

——不輕菩薩の逆縁毒鼓の折伏行と逆縁の広宣流布

さて次に、これがまさに本日のメインテーマであります、不輕菩薩が行ぜられた、逆縁によつて下種結縁をして行く折伏行、そしてそれによつて成就される逆縁の広宣流布について申し述べたいと思います。佐渡にて『観心本尊抄』を著わされた翌々月、文永十年閏五月十一日の『顕仏未来記』には次のように仰せられています。

「此の人は守護の力を得て、本門の本尊・妙法蓮華經の五字を以て、閻浮提に広宣流布せしめんか。例せば威音王仏の像法の時、不輕菩薩「我深敬」等の二十四字を以て彼の土に広宣流布し、一國の杖木等の大難を招きしが如し。彼の二十四字と此の五字と、其の語殊なりと雖も其の意是れ同じ。彼の像法の末と是の末法の初めと全く同じ。彼の不輕菩薩は初隨喜の人、日蓮は名字の凡夫なり。」

ここで大聖人は、不輕菩薩とご自分とは、互いに凡夫の身であること、劣悪な衆生が渦巻く時代に身を置くこと、そしてなによりそのような劣悪な環境の中で、かたやその人々に「我深敬」等の二十四字をもつて下種結縁していき、かたや妙法五字をもつて下種結縁していることが、全く符合しているのだと仰せられています。

不輕菩薩の二十四字とは「我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。當得作仏。」——「我れ深く汝等を敬う。敢えて輕慢せず。所以はいかん。汝等は皆、菩薩の道を行じて、

まさに作仏することを得べし。」という、不輕菩薩が四衆に向つて唱えた言葉です。『不輕品』には不輕菩薩はこの文を唱えながら、すべての人々に但行礼拝し、杖木瓦石を受けながら下種結縁していったことが説かれています。

大聖人は今妙法五字を、大難を蒙ることにより、逆縁によつて一國に下種結縁しているご自身の姿を、まさに不輕菩薩に重ね合わせておられるのです。

そして大聖人はこの不輕菩薩の利益こそを、『開目抄』にて「無智惡人の国土に充滿の時は摂受を前とす。安樂行品のごとし。邪智謗法の者の多き時は折伏を前とす。常不輕品のごとし。」と仰せられるように、「折伏」と規定されたのです。

すなわち邪知謗法の國にあつては員數獲得を第一義とせず、強（し）いて妙法五字を説き聞かせ、たとえ信ずる順縁の者はわずかであっても、謗する者を逆縁によつて、その心田に妙法を下種結縁することが肝要であり、それこそが眞の折伏行であると仰せられています。

さて先の『顕仏未来記』のご文では、もう一つ重要な事柄が述べられています。

「此の人は守護の力を得て、本門の本尊・妙法蓮華經の五字を以て、閻浮提に広宣流布せしめんか。例せば威音王仏の像法の時、不輕菩薩「我深敬」等の二十四字を以て彼の土に広宣流布し、一國の杖木等の大難を招きしが如し。」

すなわち大聖人は、不輕菩薩が受難によつて彼の土を広宣流布したように、今私も大難を蒙ることによつて広宣流布を達成しているのだと仰せられています。

この大聖人の仰せは、「逆縁世界」というフィルターを通さ

ないとなかなか理解ができません。一国を敵に回している状況がなぜ「広宣流布」などといえるのか。しかしここで大聖人が仰せられているのは、「不軽菩薩の世界」「逆縁の世界」という基準で仰せられているのであり、まさに「私は今不軽菩薩と同じように、逆縁の広宣流布を成し遂げているのだ」と仰せられているのです。

しかしこの大聖人の、不軽菩薩の利益を基軸とした折伏観・広宣流布観は、当時の門下の中にでさえ、理解ができず受け入れられない弟子が多かったようです。『開目抄』から一ヶ月ほど後に示された『佐渡御書』には

「日蓮御房は師匠にてはおはせども余（あまり）にこはし、我等はやはらかに法華経を弘むべしと云はんは、螢火が日月をわらひ、蟻塚が華山（かざん）を下し、井江（せいこう）が河海（かかい）をあなづり、烏鵲（うじやく）が鸞鳳（らんほう）をわらふなるべし、わらふなるべし。」

と仰せられ、門下の中に「我が師の折伏行はあまりにも強烈すぎる。我等はもつと穩便に法華経を弘める」と批判する者たちがいたことを披瀝されていますが、「しかしそれは不軽菩薩の利益の真意がわからぬ、さながら螢火が日月の光を笑うような戯言である」と一蹴されています。

また晩年の『諫曉八幡抄』にも

「我が弟子等が愚案にをもわく、我が師は法華経を弘通し給ふとてひろまらざる上、大難の来たれるは、真言は国をほろぼす、念仏は無間地獄、禪は天魔の所為（そい）、律僧は国賊との給ふゆへなり。例せば道理有る問注に悪口のまじわれるがごとしと云云。」

とありまして、大聖人が四箇格言をもって強烈に諸宗批判されることを、「それは道理ある裁判で、散々に悪口をたたいて不利にするようなもので、法華信仰が弘まらないのはそれゆえである」と批判する門下の存在が示されています。

これらの批判は一見もつともものようにも見えますが、今は末法濁悪の時であるという視点、そしてそれ故にこそ大聖人が、まさにわが身で示された「不軽菩薩の利益」という視点を、決定的に見失っているのです。

ひるがえって現在に目を転ずれば、現日蓮正宗宗門・創価学会・顕正会の成果第一主義の折伏観・広宣流布観も、大聖人が示された「不軽菩薩の折伏」「逆縁の広宣流布」とは、あまりにもかけ離れていることがおわかりいただけると思います。彼等はひたすら員数増加のために、脅したりすかしたり、おべっかを使ったり、時には軟禁まがいの法を犯すことまでして、それが折伏であると思つているのです。そのような行為はただ法を下げているのであって、大聖人が仰せの折伏とは無縁のものです。以前源立寺さんも関わったと聞いておりますが、継命新聞社から発行された『社長会全記録』という、故池田大作氏の言行録がありますが、そこでは大聖人と創価学会を比較して次のように語っています。

「大聖人は一人だ。総勢でも五〇人だから何でもいえた。：今は何百万だから強引にはできない。」

これはまさに先に紹介した、大聖人の真意を理解できぬ門下の批判と同じで、「不軽菩薩の利益」ということが全く理解できていない、「螢火が日月を笑う」愚説の典型といえるでしょう。

確かに大聖人一門は小さな教団ではありませんでした。しかし堂々

と一国を相手とし、正法たる妙法五字を、不軽菩薩の逆縁毒鼓の折伏行によって下種結縁し、そして大難を受けることによって逆縁の広宣流布を成ぜられたのであります。そしてその自負こそが、先に拝読した『顕仏未来記』の「本門の本尊・妙法蓮華経の五字を以て、閻浮提に広宣流布せしめんか。例せば威音王仏の像法の時、不軽菩薩「我深敬」等の二十四字を以て彼の土に広宣流布し、一国の杖木等の大難を招きしが如し。」とのご文なのであります。

そのご精神は富士門流の伝統として受け継がれ、第三祖日目上人は生涯四十二箇度の天奏をされたと伝えられています。現在の覇権主義的広宣流布観からすれば、それは四十二度の不成功ということになるのでしょうか。しかしそうではなく、「不軽菩薩の利益」からすれば、その時々にもごとくに一国への下種結縁を成就されていたのであります。

—大聖人の弟子檀越への御遺命

最後に『諫曉八幡抄』の末文を奉読いたします。

「私は法華経謗法の者を治し給はず、在世には無きゆへに。末法には一乗の強敵充滿すべし、不軽菩薩の利益此れなり。各々我が弟子等はげませ給へ、はげませ給へ。」

『諫曉八幡抄』は最晩年、弘安三年十二月に著わされた最後



山上師の講演を真剣に聴聞

の大著であり、その御真蹟が富士大石寺に所蔵されておりますが、このお言葉はその末紙にしたためられた、まさに門下への御遺命ともいえるべきご文であります。

「我が門弟らよ、この一乗強敵が充滿する末法にあつて、しつかりと私のように不軽菩薩の利益に励んでいかれよ。」

これが大聖人が遺言された、末法万年に渡り我われ門下が弘教の規範とすべき折伏行なのであります。

私も正信会はけつして大きな集団ではありません。しかしそれ自体卑下すべきことではありません。我われはその発足から、創価学会や日蓮正宗宗門という権威権力に堂々と立ち向かい、そしてこれまでに擯斥処分や数々の難を蒙ることによって、立派に逆縁の折伏をなしてきたのです。そういう意味では身の小さきことは、むしろ誇るべきことなのです。

しかしもし、そうした正義の訴えが、現在若干停滞しているとすれば、それは大いに反省しなければなりません。

本日の総会を契機として、それぞれがそれぞれの立場において、信仰の上でも、また日常生活においても、「不軽菩薩の利益」ということをしっかりと身に体し、お互い精進して参りましょう。

本日は誠にありがとうございました。

(おわり)

【所感発表】

幸せを実感する日々

大阪地区 新谷信子

本日は第五十二回源立寺法華講総会おめでとうございます。私は大阪地区の新谷信子と申します。

本日は私の信仰の始まりについて、少々お話しさせていただきます。

私の実家は熊本県の八代市にありまして、宗派は南無阿弥陀仏の真宗大谷派でございます。いわゆる門徒物知らずと言え、ただ素直で正直を旨とする、他力本願の宗派でございます。

父は八十五歳でぼっくり亡くなり、母も九十二歳で二人ともすでに、黄泉に旅立ちました。母は信仰心が強く動けなくなるまで、朝四時には早起き会に参加して神宮の掃除なども致しておりました。

私は、二十歳で大阪の大手化粧品販売会社に、美容部員として就職し、百貨店

やチェーン店に配属され、キャピキャピした生活を送る田舎者の、粗忽者でございました。

無意識に巷の思想家の言う、現代人に不幸を呼ぶ三大精神病という、自己憐憫症、責任転嫁症、依存症という、病を抱えていたのではありますまいか。結婚、出産、離婚と、女の不幸を一手に引き受けておりました。私の三十四歳の頃でございます。

離婚後は、一人娘を田舎の母に預け、自分を育ててくれた母だからと自分を納得させて信頼しておりました。しかし、そんな気持ちとは裏腹に、その時の私の寂しさは筆舌に尽くしがたく、いつも黄昏時にはピークに達して、それを酒で誤魔化す生活でございました。

その後、退職して化粧品の訪問販売会社と、営業所契約をして、化粧品の卸と小売業をいたしておりました。そんな毎日の朝の日課は、小さな喫茶店でコーヒを飲むことでしたが、そのことが私の魂の刷新、つまり、エポックメイキングの始まりでございました。

ある日、喫茶店のママさんから突然に、青天の霹靂のように言葉が降ってまいりました。

「あんた、このままでは生きて行けないよ。生きる方法を聞きたくない？」と言われ

「それはね。日蓮聖人を信じることよ。田舎に預けた娘さんをすぐに引き取れるよ。」

とのこと。

私は「信じます。信じます」と、一旦は二つ返事でしたが、創価学会と聞いて、「いやそれは困ります。田舎では村八分ものですよ。」

と。反発いたしました。しかし、

「日蓮聖人には創価学会でないと会えないのよ。」

との大嘘に騙されて、入会いたしました。すると、まず座談会に二回参加して、所感発表の作文を提出させられました。私が作ったのは、田舎に預けた一人娘を一日も早く引き取りたい心情を吐露したものでしたが、添削して返却されたのは、創価学会に入会したお陰で、すでに預けていた娘を引き取り、親子で幸せに暮らしているという、奇跡が語られていました。

そして、それを読むように強要されたことに反発すると、大事なご本尊様は頂けない旨が伝えられました。その後、何とか源立寺さんに連れられてご本尊様を頂きました。

その時、
「お寺は魔物の住処だから今後は行ってはいけない。」

と、言われて田舎の父母がお寺さんと、御僧侶を大切にされる様子を見ていましたので、創価学会は「変な宗教」だなど思いましたけれども、喫茶店のママは大切な顧客様でしたので、仕方なく受け入れました。

ただ入会後は自分が情けなく思え、だんだんママとも疎遠になり、自分が創価学会員であること自体を、ひたかくしにしておりました。

そんな時、化粧品の販売先で、秦野さ



所感発表をされる新谷信子さん

んに巡り会い、お姑さんにもお会いしました。白髪の上品なお姑さんは、源立寺法華講の豊中地区に当時所属しておられた方でした。

「優しそうなお姑さんね。」

と言うと、

「お婆ちゃんね。創価学会の時は試験、試験と言ってイラついてばかりいたけれど、今はお寺さんが変わって優しくなったのよ。」

と言われました。

私は衝撃を受け、隠していた学会員ということ、吐露して事情を話すと、

「お婆ちゃん、お寺さんに月参りしているから、一緒に行ったら。」

そう言ってお姑さんに頼んでくれました。それから、私も源立寺さんにお世話になり、何も分からないまま月参りをしておりました。

こうして私は創価学会という地獄から救われたとはいえ、相変わらず粗忽者でございました。

一年後に、千葉の方から菅野ご住職が赴任されて、初めて講話を聴き、信心の大切さを学ぶようになりました。

いよいよ法華講に入講するにあたり、創価学会の本部に脱会届を提出するように、とのことでしたので、創価学会に脱会届を出して一週間経った頃でしょう

か。眠気も醒めやらぬ、早朝五時でした。創価学会の女性三人が訪ねてきて、いきなり、

「脱退するの。成仏しなくてもいいの。」

などと、悪口雑言を並べ立てられ、とても人の振る舞いには見えませんでした。それでも創価学会を脱会できたことが、分かっただけで幸せだったのです。

結局、娘を引き取ったのは源立寺さんに、お世話になって三年後、娘が九歳の時でした。

娘が成長して結婚するまでは、親子二人で幸せな日々をいただいております。結婚後はその娘が私と正反対の性格になり、母親を冷静沈着に見て、いいとこ取りをしていました。そんな姿に、私はこの娘こそ、母親に対する提婆達多の生まれ変わりか、と思うこともしばしばございました。

しかし、創価学会経由とはいえ、娘がこの世に生まれたお陰で、法華経に巡り会えて、私の魂に新しい時代が訪れる、突破口であったことを思えば、私の感情

など克服するしかありません。また、看護師の娘に三度も命を救われたことも事実でございます。

娘は、親に押し付けられて、信仰に入った自分をもどかしく思った様でございますが、今では自ら、ご本尊様を頂き信心に励んでいます。私も、やっと娘の優しさを理解できる様になり、親子で信心の話もできる様になりました。

時間の都合上、これまでの私の人生の紆余曲折をすべて語り尽くすことは出来ませんが、観心の法門といわれる通り、すべての災難は自分の身から出た錆と気付くまで、心に反省を繰り返し、成仏の大切さを覚えてまいりました。振り返りますと、お題目で乗り越えさせて頂いたことが、不思議でもあり喜びでもありません。汚れて我欲に満ちた魂を、ひたすら美しくするための、道だったのではありますまいか。

若き時に聴聞いたしましたご住職の話が、今になって自分自身の良薬となっていたことに気付かされております。お陰で穏やかな老後を過ごしてはおります

が、流石に八十二歳の婆さんともなれば、耳も聞こえなくなりまして、ご住職の講話も音にしか聞こえません。

そこで、朝の祈りの際に『御書日訓』を読みますと、若い時に聴聞したご住職の講話が蘇ります。同時に勇気が湧き出して、創価学会が冒流した、日蓮正宗日興門流がエポックメイキングされる夢に、つながる思いがいたします。

最後に、源立寺法華講の皆様と、ご住職に深く感謝いたしました。私の話を終わらせて頂きます。

ご清聴有難うございました。



惠日だより

案内 お知らせ

* 一日研修会は延期します

六月二十三日（日）に予定しておりました一日研修会（婦人部総会）は、九月末を目処に延期いたします。

【訃報】

〔槻木地区〕 池田市

持宝院妙恵信女 五月三日寂

俗名黒川千恵子之霊 行年八十二歳

この度、右の方がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。

一応、岡山市・興風談所への参詣を予定して調整しておりますが、日時等、具体的に決まりましたら、本堂控え室に詳

しい内容を掲示してお知らせしますので、今しばらくお待ちください。

【水無月詠草】

代鋤きの すみし水田に 朝陽さし

〔和風〕

畔ぎわに寄る 波のきらめき

谷合ひの 道のカーブは 終わりたり

向ひの山に 虹の現はる

【惠日俳壇】

〔農婦〕

虎が雨企業戦士の父召さる

快活な父を語りて夏の星

〔森 秀之〕

遅咲きのさくら舞い散る走る道

亡き母を題目で祝う母の日よ

母の日に孫がバーバにカーネーション

〔故 吉田 裕〕

青梅雨や孔雀の冀の瑞みずし

母逝きし朱夏の白ひや夜の水



六月の行事

一日(土) 午後二時 お経日

二日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会

九日(日) 午後一時 お講・役員会

十三日(木) 午後一時 お講

*一日研修会は延期します

※七月号の継命・恵日発送(6月末)は、

『大阪』地区が担当です。

八月号の継命・恵日発送(7月末)は、

『北摂』地区が担当です。

◆お知らせ◆

※源立寺法華講所属の方には今年度総会の記念品として、「大黒喜道編・現代語対訳妙法蓮華経」を贈呈しております。未だ受領してない方で、ご希望の方は受付に申し込み下さい。(但し、一ご家庭一部・6月末終了)

※『恵日』紙面編集の都合上、

大阪地区 井上真理さん

の所感発表は、次号に掲載いたします。

恵日

令和六年六月号 通巻三五三号
令和六年六月一日発行

菅野憲道

編集兼
発行人

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (072) 751-3335

E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料)年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室会計

〒振替 口座番号 013801212649